

一言も言はぬに約とさるめたいの極へ可
 谷此たう暮乃たう残うらもたうくく
 う多能立折もく各兵糧と法うい下平の
 智馬より息とつうせく處に天野源右衛門
 をよひ出自是先へあくる可急者やま子細
 名味方勢より本能寺に逃る少注進可有
 者そや阿りふんた様も款いやーき者
 とは是及討まてにせよとく先へ注進
 源右衛門畏く動り急さる先へあり夏故

本寺色此燈りうりと他方者ともさる
 にま〜い〜う武者哉見付方〜下多あり
 く處〜もや本能寺に可中上り〜
 押付追廻二三十人も切捨に科た〜も
 〜〜い〜とも天野源右衛門孫人のた
 ぬに如此とう多能立等

一 光秀が桂川に着くは家中へ觸の根子
 馬のふ川と切捨めら〜ら此者とも新さる
 ち阿〜なると〜た〜や鉄炮の者とも

火繩一尺五寸にきりてを口にくくに火とてし
五々充火先をけりてあきけよとの觸り
けりて桂川をけりこゝ作事

一 燈六斗とて此少連は今日よりして天下
けりて滅滅に留下とてさうりて石下
心とみ悦とて此少連形に侍を彼二分
所とて此少連手柄は度候とてい
可中の兄弟子とてその名跡は彼を不及中
又ハ兄弟子とて此少連はとて尋出

詔藏少も相遠五石とて忠節の次者
とて高下候可汗者也

一 京中町辺候一は齋藤内花助町あり
里に下知乃様子とていふもの
可とて作ててさうりて押あをよとて
迄とてさうりていふおかま
人数り入来とていふ中
とて押あをよとていふ
と組とていふとていふ

木俣教と雲十郎より同所にてせよ表はうお
通りまゝと目高子と遊ばふみちうへる中
そやありとるんそ分心はくと調子より下
知仕まりりたふと笑之中の事

一 自是先此次有ハ信長記より委しく此彦依
信長記と世間乃る沙汰お遠のり多是迄子
此彦以二口に可成此彦は是迄此彦の右に
如中上作肥翁及此内山崎長門守関白格
涉馬廻林龜之助之時明智及信長より来つて此

兩人此真口を如此作と事と事

一 羽柴筑前守及右々備中 高松乃水攻のとき
輝元と陣和談し此取つていふ此彦等善
此上次第

一 信長公涉切腹天正十年午此六月二日備中
此切腹の注進を同日此夜の刻を子花柳ハ
轉須賀彦右衛門、涉頼成其志くくお振る
一間所へ押籠人より合ふよ能く彦右衛門
念と可入る能く也定法より知者此方より

追々注進可有くは右子一人の至来りて上様
 此切腹を頼之作自是二三里人とは出
 置と云りし如葉注を状而此婦ふこくや
 其能状迄を迄飛脚と成り終より迄人
 追逐より高松の城主長左衛門所より明日
 四つ五つの比歩陣以下へ舟と流布切腹仕
 作間下より下はたきけ下之くと能約束
 舟に定所陣力舟へ長左衛門舟と着切腹
 可及りし自上方此注進の早打飛脚上様の

様子取より沙汰仕は陣中をさうさたら
 可中事案の内ありと思召方と此飛脚道
 より追逐し能知は志水長左衛門此約束と
 不遠小姓一人但松平平兵衛と中との也と亦
 梶五二人此陣以下舟と押させぬ此約束
 下より下は助可被録は様舟の中よ此は秀吉
 涉意子の約束不遠舟と云着し事神妙
 ありはしは舟と城へ只今押着人数毎
 此方切腹はより名利家と可成後者也

其方神妙乃次者感入以是也此役辞須賀
彦右妻の森勘八此兩人を遣は志多長左衛門
うけ給此上を此助て其成事何の疑う可有此重以
見届不及中此兩人慥に此後永成くと申も
所人を腹十文字より切はとて終に松本
平藏舟錯仕は此頭兩人と申わし一重
身も同家に腹きり握取のうら侍一人
此症は舟錯さす身をも免せおきあえ
中假小姓の舟錯を握取仕は此頭二ツ兩人

所目より被懸は此一陣中めらとて誠多
よとくと此之度所う中此中

一 陣中此志川めら此縁た免とお申え中假
頭二ツ桶より入塩つ多行して此仕は此利
家毛此まゝ引不中此とて此次此れしと
くく旨今少し見及堀之右郎事此おのり
松子之とく中合あつとくしとを可
中假此頭は被露永成くとく先を森
お死福澄平左妻の所まゝ此中と上極入

乃進上とく子所三人子所を承継す事

一 所内流り及上様寺所切後始り人に之此

頼乃要換可有君行とく播州難地り

名置以所留守居三者武藝及此頼始地乃

後ん人指り新掛人心中事

一 四日に城全切腹死仕りや以るや所手前

大和坊と中陣僅を毛利及陳若川後河与

元喜小早川左馬允隆景完戸備前与元次此

三人と新佐遣次所城全志多候去今頼掛者

陣の家一舟と着切後子及以如約束家中此着

一人も不務武道具以下に命まて進く是に迎

毛利陣は新お渡以此上者此長陣の事

下り以守守陰りと被思召く生中に今一先退

下中候為とく靈社の起後ををく以女と通於

此同心者所陣修一人此候此添は承可預以

者也と新佐遣と家子毛利家と城を八尾控候

上者無控りとや三人新思希人一先輝元も

所馬城に入すことと此出陣も新承以候と

談合語定めて免らさるる事

一 其時安國寺と所供より其流能前より後筆本見
 くとくは進出能前より後筆本見のとある
 此陣より二町計處へ被出長刀下より上下
 十四五人は右連とも方角阿みうさといふ杖
 下りまわりの内約く處子右に陣備より安國寺
 一人流中より被射り棄て棄てて所手前より
 陣備の意より見射まわりの安國寺は下地上方
 とのより東福寺より棄て棄てん仕り流中

能前と見知不中の事上より小布く此供より
 くとく一圓ふりて不中と處に秀右所意よりハ
 毛利家の陣備よりと裁別家より羽柴
 能前より作とたうとつり所右系能前ハ
 此後よりハ流一り流とは存くと畏て作
 毛利家陣備よりと中上作所意よりはさるハ
 我陣よりと右連のとくは進出より所供
 仕系と處より所供目と撃つたりたる陣備へ
 此入流能は毛利家陣備是とせしむる

たふ好う記此彦番ましく石寄をく事

一 次者此有格を借いさ心たいうせい借うしく此尋
 注知く番子安国寺此返りしはせい借のまか
 正と仕以借うくはと中よに去おく祝の為
 ありし所意を承さんおりに引渡し此出
 承はさ違ふ一人取りておくし心入る
 と見え中候まより此好うち栗を承うと持
 う小姓出の所手法うは此を成先祝のためふ
 とてくうちくおきし心にはほふみくおま

此遣の安国寺法を戴懐中へたさ免く事

一 毛利家大形合点子作を我弟の筆かを見を
 作しんと所意しんまふを給よりうおひけ
 何り精進者門さひあうう也それお給
 うくとり水は承所身ときよめら違やうて
 此出承承は毛利家ハ巻毛角毛く人扱者心
 中におわくく多此起清の面おもお違ままし
 きとて同好おもく書判を承おまよふ白き
 さうと此お寄を承承た此お指より血と此出

一 是年書刺乃上子押付是年

一 陣和談以り進首尾仕る向此上をまゝに有る様
 子と云んり然いり來をまゝ入魂仕仕りや
 可有目出度くはるべき物とて師意しんる
 上より蓋よかきけ出る上安國さふは老い
 まかりけ又右上方言葉よりハ年あきく
 おさ免置以掛者陣傳とて僧は右邊く人免
 利家此年幸見可中ためこいしく則此年
 茶の陣僧安國さふは遠毛利家へ送

る年

一 毛利家先年ハ有る三人より輝元も同本様
 掛の城より如く一川と中大河と隔く但此
 三里より三人より輝元への注進志有
 長左衛門 奉もや〜切替り及以宿お守
 所より高松乃城子立籠下く武道具家射
 下におもく是後所味方乃陣へ送り看
 中作事上陣和談より仕一先より馬込
 可納り由中來はるり引退る時此表裏

仕る方とく君社の起債と持を陸信余は
此上先有通に証紙義兵を重なるのゆゑ
予証紙を可致いんと三人より市中上
と安子輝元返りしは何程も三人分
別次者たるを返来しにき返りし証紙
証紙届く事

一 証紙を返り来た陣借は若くは君社の起
債刺を切つたらし是に大形下く証紙之中通
も証紙を返すは是れも表裏有きくはき

毛利家証紙退くとも証紙を返すより表裏ある
ましくは証紙とお守り事

一 同日四日成割計り森勘八と石蔵子入るは
引退をともせりさ所におるくハ勘八
跡可中彼等の証紙を信長公所切腹の証紙
毛利陣へもとやしくお守り可中彼今朝
乃証紙を破りて返付し事もむはき子細
も毛利家証紙へハ未だ先此証紙をり表
裏も秀吉と仕毛利家証紙表裏しる事